

駒沢大学大学院商学研究科教授

## 藤本幸太郎先生を悼む

森 凱 雄

藤本幸太郎先生は、昭和四十二年六月一日、病氣再発、御入院中のところ、加療の甲斐なく、ついに、享年八十六才をもって、惜しまれつつ、黄泉の客となる。駒沢大学大学院商学研究科の創設とともに、本大学に関係せられ、本大学の発展のために、教育家としての最高とも思われる情熱を傾むけておられた時だけに、先生の逝去は誠に遺憾のきわみである。

本大学大学院商学研究科設立の際、商学研究科科長笠森伝繁先生は、大学院専任の統計学教授の選考に当り、一橋大学学長増田四郎博士に御相談申し上げしところ、同博士より藤本幸太郎博士の御推挙あり、同博士はわざわざ藤本先生宅まで出向かれ、教授就任方を特に懇請せらる。なおまた、笠森先生も、何回となく藤本先生と面悟せられ、統計学専任教授として商学研究科を御指導願われんことを切望せらる。藤本先生は、増田博士の熱意ある推輓と笠森先生の懇望に心良く御承諾されたばかりでなく、駒沢大学大学院商学研究科の設立に参画し、大学院の重鎮として大いに活躍さる。

藤本幸太郎先生は日本における統計学の先駆者であり、また、その確立者でもあられ、先生の影響は実に顕著なるものがある。先生は、明治四十三年、英・独に留学、特に統計学の研究に従事せられ、その業績、極めて重く、長く日本統計学会及び日本統計協会の会長としてその発展に尽粹さる。先生は、主なる著述として、日本の統計学に貴重なる「経済統計」、「統計学」その他を公にせらる。

さらに、藤本先生は、統計学のみならず、保険学、特に、海上保険の研究の泰斗にして、その著書として、「海上保険論」、「共同海損綱要」その他をのこさる。私は、藤本先生とは四十年來の親交をもち、かつては、ともに「粟津博士保険論集」の刊行委員となり、また、ともに「論集」に執筆する等、つねに日本の保険学の発展のために協力致した。先生の保険学界及び業界にのこされた業績は誠に偉大というべきであらう。

藤本幸太郎先生は、日頃の述懐の御言葉に、

「私の母は仏教の信者であつて、いつも私に仏のおしえのありがたさをしみじみと語っていました。その私も仏道に帰依してこの世を終わりたいと思つています。幸いに私は駒沢大学に関係することができ、これも、母のみちびきによるものと思われ、深く深く感謝しております。私は駒沢大学とともに生きて、駒沢大学で死ぬつもりであります。」

と申しておられた。こう語られた先生の温顔が、彷彿として、私の脳裡に浮んでまいります。ここに、先生の生前を偲ぶとともに、略歴をしるし、先生の御冥福を祈念してやまない。

〔藤本幸太郎先生略歴〕

明治 十三年七月四日 三重県四日市に生まる

〃 三十八年七月 東京高等商業学校専攻部を卒業す

〃 四十二年八月 同校教授に就任す

〃 四十三年八月 商業学並びに統計学研究のため三ヶ年英国及び独国に留学す

大正 九年十月 東京商科大学教授兼附属商学専門部教授に就任す

論文「委付の性質並びに其の効果を論ず」によりわが国最初の商学博士の学位を受ける

〃 十一年九月 東京高等商船学校講師に依嘱さる

昭和 二年四月 文部省督学官を兼務す

〃 九年七月 勲二等に叙せられ、瑞宝章を授けらる

〃 十六年三月 東京商科大学を退官す

〃 〃 四月 正三位に叙せらる

〃 〃 六月 東京商科大学名誉教授の名称を受ける（昭和二十六年十二月に一橋大学名誉教授となる）

〃 二十一年四月 東京商科大学海務学院講師に依嘱さる（昭和三十七年三月まで）

〃 二十二年三月 明治大学教授に就任す（昭和三十四年以降は講師）

- ” 二十四年二月 東京海上火災保険株式会社監査役となる（昭和二十八年六月まで）
- ” 三十八年五月 藍綬褒章を受章す
- ” 三十九年四月 旭日重光章を受章す
- ” 四十一年四月 駒沢大学大学院商学研究科教授に就任す
- ” 四十二年六月一日 逝去 享年八十六才十一ヶ月